

新生子溶血症(黄疸)について

日高軽種馬農協荻伏診療所 和智荘平

生産牧場の皆様は新生子溶血症(新生子黄疸)という病気を過去に遭遇された方はいらっしゃいますでしょうか。今回は新生子溶血症について書かせていただきます。

通常ウマは赤血球に対する抗体を持っていませんが極一部の血液型を有する母馬が妊娠中もしくは分娩時の胎盤を介した出血などにより、胎子の赤血球が母馬の体内に入った際に、新生子馬の赤血球を壊してしまう抗体が作られます。その抗体を持った母馬の初乳を新生子馬が摂取すると、新生子の赤血球を異物と認識して攻撃し、赤血球を壊し(溶血)、貧血や黄疸が引き起こされ新生子溶血症が発症します。発症率は0.1~0.2%といわれています。

新生子溶血症の出生後から発症までの時間や症状の程度は、子馬の初乳の吸収状況と母馬の抗体の保有程度によって様々です。症状の発現は早いものでは出生後6時間以内、遅いものでは生後5日目くらいで発症する仔馬もいます。症状としては呼吸数や心拍数の増加、元気消失による哺乳回数の減少、さらに血色素尿(赤色の尿)が認められます。溶血に起因する貧血により、発症初期には目や口の粘膜は蒼白色となり、その後黄色化(黄疸)が認められるようになります(写真1)。

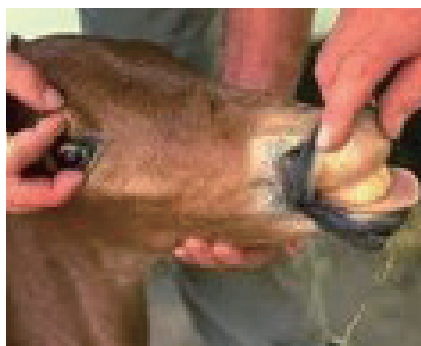


写真1: 粘膜の黄色化

症状が悪化すると沈鬱状態、脱水などが加わり重症例では低酸素症ショック、神経症状、多臓器

不全、敗血症などを併発し死亡する場合があります。

この病気の発症や進行を防ぐためには出産直後の子馬の観察と迅速な処置が必要となります。

新生子溶血症を発症した場合、速やかに初乳摂取を中止し、貧血の状況によりユニバーサルドナー馬(写真2)からの全血輸血を行います。



写真2: ハフリンガー種のユニバーサルドナー馬の資料室: 馬の輸血とユニバーサルドナー (jra.jp)より抜粋

新生子溶血症を発症した子馬の母馬は次以降の産駒に対しては、生後24~36時間まで口かごを装着することで初乳の摂取を防止し(断乳)、ストックされた他馬の初乳を投与します。

子馬にとって初乳というのは非常に大切なもので、もし初乳により免疫成分を獲得できないと、仔馬自身で抗体を作れるようになるまで1~3ヶ月の間感染症の危険にさらされることになります。

最後になりますが新生子溶血症は早期発見と治療によって十分な回復が見込めます。初乳摂取後の子馬を注意深く観察し、普段との違いに何か気づかれましたらかかりつけの獣医師に相談されることをお勧めします。

今回のお話が生産牧場の皆様の一助になれば幸いです。